

# 人が乗った車を人が曳く —人力車—

## ■人力車の発明

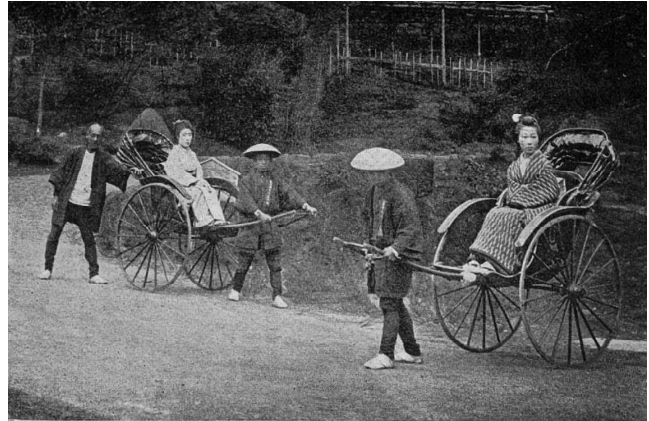
「人が乗った車を人が曳く」、すなわち人力車はその名称が示すように、人の力によって走る車であり、スピードも車夫の力によって制限され、遠距離の乗用には向かない。車夫がかじ棒を上下にすることで、車上の客は常に水平に保たれ、快適な乗り心地になるような機構になっている。人力車の発明は諸説あるが、1870年(明治3)3月、東京府から人力車の営業および製造の許可を得た和泉容助、高山幸助、鈴木徳次郎の3名といわれている。

人力車は、それまで使われていた駕籠より移動が速かったのと、馬より人間の労働コストのほうが安かったため、すぐに人気の交通手段となった。人力車は安全性の高さと、運賃の安さ、玄関先まで届けられるという小回りの良さが受けて、急速に普及し、1871年に東京府下で4万台まで増えている。それから3、4年もたたぬうちに、全国にあっという間に普及した。

## ■車夫という職業の誕生

人力車を曳く人のことを「車夫」といい、没落士族、駕籠かきの他、失業者、農村からの転入者が多くを占めた。車夫という職業は資本がかからず、体が丈夫であれば誰にもできた。手続きが簡単なうえ現金収入なので魅力的な職業でもあった。車夫の仕事着は、饅頭傘、法被、股引き、足袋で提灯とロウソクは必需品である。

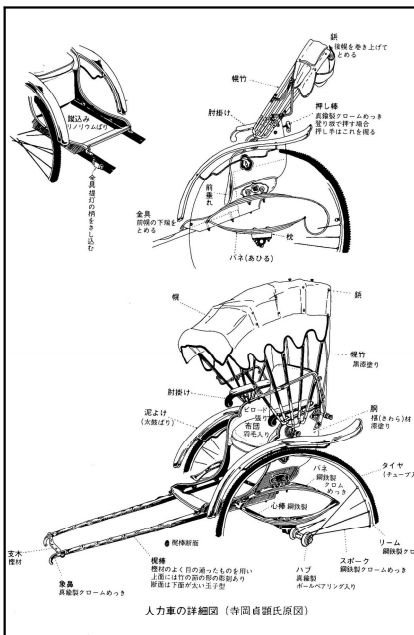
車夫には次のように分類できる。①お抱え車夫(個人、会社他雇われ車夫)、②宿挽子車夫(タクシー会社が運転手を雇って営業しているのと同様に、車夫を雇って営業)、③番の車夫(人力車営業組合に加入しているもので、人力車駐車を拠点とした組織が「番」、その株をもつ車夫)、④もうろう車夫(人力車は借り物で組合に入らず、流して営業。乗車賃も決めていない。無鑑札車もあった。)



初期の人力車 パブリック・ドメイン



車夫に仮装したエドワード八世  
パブリック・ドメイン



人力車の構造と各部の名称 出典：齊藤俊彦『人力車』

## ■人力車の普及と衰退

初期の人力車は、木箱に車輪を付けただけの単純な構造で、木製の車輪に鉄板を巻いていた。その後、バネ付きの車輪やゴムタイヤ付きのスポーク車輪に変わり、明治末には空気入りのゴムタイヤへと改良されて、乗り心地が大幅に向上した。また、幌と泥除け考案され、天候に関わらず快適に乗車できた。人力車の普及は全国に広まり、1897年(明治30)には20万台を越すまでになった。

1895年(明治28)に各都市で路面電車が導入されると、人力車営業者に与えた打撃は大きかった。明治末になると自転車の国産化が始まり、「人力車の敵」と言われた。大正時代にタクシーの出現によって、タクシーのもつ迅速性、快適性、高級感、人力車を街の片隅に追いやり、車夫は廃業に追い込まれた。

時代の流れで、交通機関としての人力車は絶滅してしまっただが、現在は東京の浅草、岐阜の高山始め、全国の観光地で「観光人力車」として復活している。徒歩以上自転車未満の速度と心地良い揺れで、旅情を楽しむ。人力車の新しい魅力である。

(富成一也)